

真宗学の實踐における体験の意義

中山 量 純

一 真宗学の意義

真宗学とは、親鸞の著述を学ぶのではなく、親鸞の仏道の方法論を学ぶことである。つまり、真宗学を教理学ではない実践の学とするには、『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』）を学びの対象とするのではなく、『教行信証』が対象とするものを対象としなくてはならない。この『教行信証』そのものの持つ仏道としての性格に注目するとき、親鸞が現前する問題を如何に解決したのかではなく、如何に向き合ったかという仏道における方法が課題となる。それこそが、浄土真宗を教理ではなく、実践的に捉えることになると考えられる。

そこで、今回の論文では、親鸞が仏道を歩む上での出発点、いわゆる立脚地を、親鸞の行実に即しながら、その個人的体験を超えるような意義を確かめたい。それが、浄土真宗という仏道を考えていくうえでの指標となると推察する。

二 法然との出遇い

親鸞の仏道における立脚地は法然との出遇いである。それは『歎異抄』の中で、

親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをまふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。
（『定親全』四言行篇一・五頁）

と伝えられることから明らかである。また『恵信尼書簡』でも、親鸞が比叡山を下り、法然と出遇うまでの行実を語りながら、法然の教える「生死出づべきみち」⁽¹⁾に聞き入る親鸞の姿が伝えられる。さらに『教行信証』をみても、法然の引用は総結三選の文のみであることから、この「たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」⁽²⁾は、親鸞が法然と出遇い、そこから凝集的に聞き取った、ただ一つの教えであろう。

比叡山において、親鸞は常行三昧堂の堂僧であったことが伝えられる。そのため、念仏の実践と学問には、法然に出遇

う前から触れていたと推察される。その中で、『恵信尼書簡』によれば、親鸞の常の課題は「後世」にある。つまり、浄土教でいえば往生浄土、大乘仏教では大涅槃の実現である。ここから、親鸞の比叡山下山は、自力の修道体系を背景とする比叡山の法華一乗の法では、涅槃の実現という課題が解けなかったからと考えられる。

このような課題の中で、親鸞は法然の教えによつて、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。
 (『歎異抄』『定親全』四言行篇一・六頁)

という自力無効の身の事実が明らかとなる。仏教において真実教とは出世本懐経のことであるが、それは衆生が仏の出世の一大事を仰ぐことができるか否かで決定される。そのため、それは世間的に役立つことと関係なく、人間の根源的な苦しみ、即ち人間存在そのものを明らかにするような教えである。親鸞にとつて法然との出遇いは、それまで自身が仏教に求めてきたところの全てが否定され、煩惱具足の凡夫という事実を見抜く本願との出遇いであつたと思われる。そこで『教行信証』では、

然に愚禿釈の鸞、建仁辛酉の曆、雜行を棄てて本願に帰す。

(『定親全』一・三八一頁)

と表明する。『恵信尼書簡』や『歎異抄』は、親鸞の体験に基づくが、『教行信証』ではその体験の道理を、親鸞自身が

真宗学の実践における体験の意義(中山)

本願の成就した感動に立つて表明している。

三 真実教の決定

『教行信証』は、その次第のとおり、まず真実教とは何かということから始まる。

夫れ真実の教を顕さば、則ち大無量寿経是なり。斯の経の大意は、弥陀、誓いを超発して広く法蔵を開きて凡小を哀れみて選びて功德の宝を施することを致す。釈迦、世に興して道教を光闡して群萌を拯い恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。是をもつて如来の本願を説きて経の宗致とす。即ち、仏の名号をもつて経の体とするなり。
 (『定親全』一・九頁)

この確固たる宣言は、先に述べた法然との出遇いの確信に基づくものと伺われる。そして、経の大意について、弥陀・釈迦の二尊の恩徳を仰ぎながら、経の宗体が示される。経の宗体によれば、『大無量寿経』(以下、『大経』)は本願を宗とし、名号を体とする經典であり、これは前の弥陀の恩徳と重なる。弥陀の恩徳は、『大経』の重誓偈⁽³⁾に依つて述べられており、そこでは超世と凡夫の救い、名号の回施が誓われる。そこからみれば、『大経』は弥陀の恩徳を説く教説と考えられる。

しかし、今ここに釈迦の恩徳を並べる。これは親鸞の自釈のあとに引用される『大経』発起序の一文が用いられる。そこには釈尊と阿難との出遇いが説かれており、ここをもつて

『大経』が出世本懐経であることが示される。ここで二尊教として『大経』の大意を述べることは、親鸞が法然との出遇いに釈尊と阿難の出遇いを重ねたと考えられる。それは、その体験が個人を超えて、釈尊や法然を世に出だした本願のはたらきに触れたこととして同義だからである。冒頭に、

謹んで浄土真宗を按ずるに二種の回向あり。一には往相、二には還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

（『教行信証』『定親全』一・九頁）

と述べられるように、弥陀の恩徳は、教行信証という仏道を実現する往相回向そのものであり、釈迦の恩徳は、近くでは法然として示されるように、『浄土論』の出第五門に説かれる還相回向の具体相として考えられる。しかし、これらは別にあるのではない。『正像末和讃』に、

南無阿弥陀仏の回向の 恩徳広大不思議にて

往相回向の利益には 還相回向に回入せり

（『定親全』二和讃編・一八三頁）

とある。ここに「回入せり」とあるように、すでに回入している。名号を体とする本願のはたらきによって、往相回向によって実現される仏道が成就するとき、そこにはすでに還相回向のはたらきも感得している。したがって、弥陀釈迦や往相還相と二種類あるようにみえるが、真実教の決定というときには、それら全てが本願の成就として感得される。それ

が、親鸞が法然と出遇った感動の正体である。

さて、『大経』を二尊教として受けとめたあと、

何を以てか、出世の大事なりと知ることを得るとならば

（『教行信証』『定親全』一・九頁）

と添えて、『大経』の発起序が引用される。この一文は、『法華経』を出世本懐経と位置付ける「唯一大事の因縁を以ての故に世に出現して」という言葉をうけたものと、従来指摘される。『大経』は、先ほどの釈迦の恩徳としても述べたように、

如来、無蓋の大悲を以て三界を矜哀したまう。世に興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利を以てせんと欲してなり。

（『真聖全』一・四頁）

という一文から、『大経』を出世本懐経として位置付けてきた。それ故に、真の出世本懐経は『法華経』か『大経』かという対立関係となる。

しかし、改めて親鸞の自釈をみると、そこでは、出世本懐経として提示されたものを真実教として妄信するのではなく、『大経』こそ出世本懐経と決定した信心の内実を問題とする。そのため、ここでは『大経』を真実教と仰いだ所以によって出世本懐経であることを確かめる。

このことを踏まえて『大経』の引用を見ると、阿難が「今日世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔巍巍とまします」と仰ぎみることから始まる。『大経』の原文では、

その時、世尊、諸根悦予し姿色清浄にして、光顔巍巍たり。尊者阿難、仏の聖旨を承け、即ち座從り起ち、偏に袒右肩し、長跪合掌して、仏に白して言さく

〔真聖全〕一・四頁

という一文が前にある。つまり、阿難は「仏の聖旨を承け」ることによって仏を仰ぐ。しかし、親鸞はこれを引用しない。この意味とは、何か他に真実というものがあるのではなく、阿難が仏を仏として仰ぎみるという値遇における目覚めがそのまま真実であり、そこが仏道の出発点であると考えられる。

また、未離欲の凡夫と伝えられる阿難が、「未だ曾て瞻觀せず、殊妙なること今の如くましますをば」⁽⁵⁾と述べるように、今はじめて仏を仏として仰ぎみる。仏の覚りは仏にしかわからない。しかし今、凡夫である阿難がその身のままに仏を仰ぐ。また、それを念ずるところの讃嘆として、五徳現瑞と仏仏相念の世界が説かれる。この世界は、釈尊以前より伝統される本願の歴史に触れた感動である。そして、「何が故ぞ威神の光、光乃し爾る」と、阿難は釈尊にまで伝統されてきた本願の歴史を問う。

ここにきてようやく、釈尊は阿難の問いをほめ、「世に興したまふ所以」を説きあかす。そこに述べられる「群萌の拯い」は、未離欲の凡夫の身のままに仏を見えるという阿難の目覚めである。これは本願が衆生の上に実現した証拠である。

真宗学の実践における体験の意義（中山）

る。だからこそ、この阿難が問うた出遇いの意味は、本願の歴史の上で決定的であった。

四 まとめ

かくして、真実教は阿難の値遇に決定される。それは群萌に開かれる本願の仏道の開顕である。『教行信証』はこの後、行信証と著されるが、それは仏道の道程を表現しているのではない。親鸞は法然との出遇いの意味を本願に聞くことで、そこに念仏の伝統、信心、涅槃ということが自覚的に顕かとなつたことを著していると考えられる。そのため、教巻で真実教とは何かという説明をしない。ここでは法然との出遇いを本願がこの身に成就した事実として顕かにしている。

- | | |
|--------------------|----------------|
| 1 『定親全』三・書簡篇・一八八頁。 | 2 『定親全』一・六七頁。 |
| 3 『真聖全』一・一三―一四頁。 | 4 『真聖全』一・二七七頁。 |
| 5 『定親全』一・一一頁。 | |

〔凡例〕

一、出典は次のように略記した。

『定本親鸞聖人全集』（法蔵館、一九六九）→『定親全』
『真宗聖教全書』（大八木興文堂、一九四二）→『真聖全』

〈キーワード〉 浄土真宗、親鸞、『教行信証』、真実教

（大谷大学大学院）